

## 越王勾踐 ‘維甲令’ の文法構造

高木 雅弘

### まえがき

今回取り上げる越王勾踐 ‘維甲令’ というのは、『越絶書』巻第三・「越絶呉内傳」第四に収められている文章である。そこには、越王勾踐が春秋時代末期（前494）、会稽山で呉との戦いに敗れ、屈辱的な降伏をしたのち、再び越の本国にもどって呉に対する報復戦を準備する際に発せられたという命令であり、‘維甲’ということばで始まっているので、便宜的に‘維甲令’と呼ばれているものである（以下『維甲令』とする）。その文章はそれほど長くないので、以下に句読点を付けて掲げることとする（文頭の数字は行の順番）。

- ①越王勾踐反國六年、皆得士民之衆、而欲伐呉。
- ②於是、乃使之維甲、維甲者治甲。系斷、修内矛、赤鷄稽繇者也、越人謂人鍛也。
- ③方舟航、買儀塵者、越人往如江也。治須慮者、越人謂船爲須慮。
- ④亟怒紛紛者、怒貌也。怒至士擊高文者、躍勇士也。
- ⑤習之於夷、夷海也。宿之於萊、萊野也。致之於單、單者堵也。

『越絶書』は、後漢時代に入ってから事項が記載されていることから見て、その成立はそれ以降ということになるが、春秋時代を含め、先秦時代に関わる記録や伝承も雑多に採録されている。東洋文庫に所蔵されている『越絶書』の刊本はいくつかあるが、本論考では『龍谿精舍叢書（史部）』（請求記号 V-5-C-25）所収のものを使用することにした（後図）。

漢字の上古音・中古音は、B・カールグレンの *Grammata Serica* を参照するのが通例であるが、網羅してある字数の多さや、ローマ字表記

が国際音声記号に近く、拼音（ピンイン）、絵画による索引が完備して使いやすいことなどの条件から、今回はその中国語訳『漢文典（修訂本）』を優先的に利用することとした。本論考では上古音と中古音（それぞれ‘上’、‘中’と表記）を掲げ、現代中国語音は必要ないので割愛し、理論的に再構された形であることを示すアステリクス（\*）も省略した。なお、本論考では議論をわかりやすくするために、先秦時代の中国語系の言語（文言文）についても、‘漢語’、‘漢文’という用語を使うことにした。

『維甲令』は、筆者が知るかぎり、中国語以外の言語では、すでにタイ語と比較する研究がなされている<sup>(1)</sup>。他に、古代越語の資料としては、『説苑』「善説」に収められた、いわゆる『越人歌』というものがある。これは、インドシナ半島のチャム語、および中国南部のタイ系の言語に属する壮語（またはチワン語）と比較した研究がある<sup>(2)</sup>。筆者は、東南アジア方面の言語については専門外であるので、これらの研究についての当否を論評することは控えたい。しかし、『維甲令』については、同じ‘越の言語’といっても、『越人歌』とはかなり性格が異なっているように見える。

『越人歌』は、（前6世紀頃か）楚の領内にいた越人の船頭が楚の貴族の前で歌ったものであり、韻文の形式をもち、押韻もされているのに対し、『維甲令』の方は、越王勾踐が（前5世紀初頭か？）その配下の将兵たちに発した布告であると言われているが、韻文というより散文に近く、押韻も見られない。幸いなことに、両方とも漢訳（『越人歌』の場合は‘楚訳’）が記載されていて、全く取り付く島のない未知の言語というわけではない。

『越人歌』と壮語との比較は、かなり説得力があるように思えるが、『維甲令』の方は、むしろ日本語と酷似した例が見られる。特に3行目の「買儀塵」《往如江》の部分がそれである。ちなみに、この研究の先駆者である鄭張尚芳論文（注1文献の4頁）では、この語句を現代中国語訳で《決意揚眉吐氣地航行前進》（意気昂然として航行し前進することを決意する）としているが、《往如江》（往くこと江のごとし=江[かわ]のように行く）という、原注の意味とはかなり違ったものになって

いる。特に、「江」という重要なことばが見られない。今回の研究では、この語句の分析から始めて見たいと思う。

## 1. 「買儀塵」

まずはじめに、3行目の文の途中の「買儀塵」《往如江》の分析から始めたいと思う。筆者はさきに、『東洋文庫書報』（第47、48号）で高句麗語に関する考えを発表する機会を与えて頂いたが、少しでも高句麗語の研究をしたことのある人間にとって、「買」ということばは、かなり注意を引くことばである。なお、『増訂漢魏叢書』所収の刊本（請求記号 E-V-5-B-0001）では、「買」を「賢」としているが、これは単純な誤刻であろう。

もし、「買」が《江》を意味していたとすれば、高句麗語の「買」《水、川、井》を思い起こさせる。ただし、高句麗語の「買」 $m\wedge j$ （修正形<sup>\*</sup>me）は、高句麗末期の七世紀頃の発音であると見られるのに対し、それ以前の5世紀初頭の発音は「彌」 $mi$ に近い音であった可能性が高い。そのため、「買」を高句麗語と直接関連づけることはできない。

邵城縣、本高句麗買召忽縣。景德王改名。今仁州。一云慶原。買召一作彌鄒。（邵城縣は、もと高句麗の買召忽縣なり。景德王名を改む。今の仁州〔なり〕。あるいは《慶原》といふ。買召、あるいは「彌鄒」に作る。）〔『三国史記』卷35・地理二、漢州〔栗津郡〕買召忽縣、一云彌鄒忽。（買召忽縣、あるいは「彌鄒忽」といふ。）〔『三国史記』卷37「地理志」地名表〕彌鄒城…〔『好太王碑文』（『広開土王碑文』ともいう）の第2面〕

「買」の上古音は再構されていないが、共通の声符をもつ「賣」は、日本語の万葉がなでは「エ列甲類」の「メ」(me)をあらわす。これは同じ発音をあらわす「綿」や「面」といった文字から判断すると、<sup>\*</sup>miaのような音にさかのぼり得る。したがって、『維甲令』の「買」も<sup>\*</sup>m'ia < <sup>\*</sup>mi+ijaのような音を再構することが可能になる。

\*mi は、発音上では日本語の「ミ（ヅ）」(< \*mi[.N.tu])《水》と、意味的には高句麗語の「買」\*me (< \*mi)《水、川》と比較することができる。うしろの \*+ija は、日本語の「エ」《兄 (=年長者)》、高句麗語の「也 (次)」\*ja[.c]《母 (の)》、「夜、耶」ja《長》との比較が可能である。ちなみに、タイ語では《川》のことを mɛɛ.náam (mɛɛ は《母》、náam は《水》)《水の母》という<sup>(3)</sup>。発音や語順はまったく異なるが、意味的には共通性が感じられる。日本語の「エ」《江》も「エ」《兄、年長者》と同じくヤ行のエ (je) である点は興味ぶかい。この「買」\*m'ia に似たことばは、現在の山東省東部や江蘇省北部の古代水名に見られる。

巨洋水、即『國語』所謂「具水」矣。袁宏謂之「巨昧」。王韶之以爲「巨篋」。亦或曰「胸瀾」、皆一水也。(巨洋水は、すなはち『國語』のいはゆる「具水」なり。袁宏これを「巨昧」といふ。王韶之もって「巨篋」となす。また、あるいは「胸瀾」といふ、みな一水 [=同じ川] なり。)〔水經注疏、二十六、巨洋水〕

「巨洋水」の「洋」が「洋」mi (< \*mied) の誤記であったとすれば、「昧」(音「蔑」)、「篋 (=蔑)」miet (< \*miat)、「瀾」mjie (< \*miar) に近い発音となる。

昔呉將伐齊、北霸中國、自廣陵城東南築邗城、城下掘深溝、謂之「韓江」、亦曰「邗溟溝」。…(昔、呉まさに齊を伐ち、北のかた中國に霸たらんとす。廣陵城の東南より邗城を築き、城下に深溝を掘る。これを「韓江」といひ、また「邗溟溝」といふ。…)〔水經注疏、三十、淮水〕

この「韓江」(<邗溝) というのは長江と淮河を連絡するために掘られた運河を指す。「韓」(上古音 g'an / 中古音 ɣan) と「邗」は同音で、「溟」mieŋ が《江》にあたる。これは、うしろに「溝」kəu が存在していたために、鼻音 N が軟口蓋音の ŋ になったのであろう。mieŋ は、

\*m'ia+N に分析できるが、うしろの \*+N は、日本語の「～ノ」と同じく、属性をあらわす格助詞に似ている。

「買」が《江》であったとすれば、「儀塵」は《往如～》(《ゆくこと～のごとし＝～のように行く》)のような意味になろう。「儀」ŋi は、その声符「我」ŋa の存在を考慮に入れば、\*ŋia のような形を再構することができるが、『維甲令』の漢字音が上古音よりも中古音に近い点を考慮に入れば、\*ŋie のような形になろう。「儀塵」ŋie.diën (修正形 \*+N.gæd.ji.n[n]) も、日本語と比較することが可能である。

頭子音を除いた部分(韻母)の ie の音は、上代日本語の「エ列甲類」の「エ」(e)と「オ列乙類」の「オ」(ö)に対応するが、ここでは後者になり、\*æ < \*ä の音を推定しておきたい。「塵」の頭子音 d はその後に接続して、日本語の助動詞「～ゴト(ク)」《如、若》と対応する。したがって \*+N.gæd+ は、下のようなになる。なお、日本語では「～ノ・ゴト・ク」《～如く》を「～ノ・ゴト」のように接尾辞「～ク」が付加されない場合があるが、この言語でもその存在は確認されない。

+N < \*+n[a] / \*+n[ä] (「～ノ」 < +nö 《[格助詞・属性]～の》)  
gæd < \*kätä (「コト」 < kötö 《同、如》)

「塵」の頭子音を除いた部分 .in (= \*ji.n) は、日本語「イヌ」《往ぬ》(連用形「イニ」と対応し得るが、意味的にはさらにその後に続く要素、「～ニ」《～(する)ために》という目的をあらわす格助詞(与格) \*+ni の存在を推定できる。

ji.n[n] < \*di.n-ni+ni / \*di.n-ri+ni (「イニ」《往》、「～ニ」《[格助詞・目的]～ために》)

連用形の接尾辞と与格接尾辞の合体した \*-ni+ni が重音省略(haplology)で .ni という形になり、さらに語末の母音 -i が消滅したことが考えられる。

以上のことから、「買儀塵」は《江のように行くために》という意味になる。「江」は、普通は《長江》のことをさすが、それ以外の重要な水路をさしていた可能性も捨て切れない。もし「買」が《長江》をさしていたとすれば、越軍の出発地は、長江の江口より上流ということになるが、もちろんそれは事実とは異なる。ただし、《大河の流れのように

ゆったりと進むために》という比喩的な用法としてなら理解できる。

## 2. 「方舟航」

次に、その直前の三文字「方舟航」は、いずれも《船》をあらわすことばであることが知られている。

方、併船也。…（「方」とは《併船 [= 船を並ぶる]》なり。…）

〔説文、八・下〕

舟、自關而西、謂之船。自關而東、或謂之舟、或謂之航。南楚・江・湘、凡船大者、謂之舸。小舸、謂之舫。…東南丹陽會稽之間、謂舫爲櫂。（《舟》、關より西、これを「船」といふ。關より東、或いはこれを「舟」といひ、或いはこれを「航」といふ。南楚・江・湘、凡そ船の大なる者、これを「舸」と謂ふ。小舸、これを「舫」と謂ふ。…東南丹陽・會稽の間、「舫」をいひて「櫂」となす。）〔方言、九〕

「舟」と「航」は函谷関以東の古代中国東部地域の方言で、いずれも《船》を意味したようであるが、「航」（または「杭」「航」）自身が《方舟》を意味したことも知られている。

方舟、謂之潢。【注；揚州人呼渡津舫爲杭、荊州人呼潢。】舫舟、謂之浮梁。（《方舟》、これを「潢」といふ。【（郭璞の）注；揚州人は《渡津舫》を呼びて「杭」となし、荊州人は「潢」と呼ぶ。】《舫舟》、これを「浮梁」といふ。）〔方言、九〕

航、方舟也。从方亢聲。…（「航」とは、《方舟》なり。方にしたがひ、亢の声なり。…）〔説文、八・下〕

西征攘白狄之地、至於西河、方舟設汭、乘桴濟河、【方、併也。編木曰汭、小汭曰桴。濟渡也。】至于石枕。（西のかた征して白狄の地を攘〔はら〕ひ、西河に至る。舟を方〔なら〕べて汭を設け、桴に乗りて河を濟〔わた〕り、【「方」とは《併》なり。《木を編む》を

「洑」といひ、《小洑》を「桴」といふ。「濟」とは《渡》なり。】石枕に至る。）〔國語、齊語・第六〕

「杭」「航」は、いずれも「航」に通じ、《方舟》をあらわしたものと見られる。「方舟設洑」という表現から考えると、川を渡るために、木材や船を縄や紐などで固定して‘いかだ’や‘浮き橋（＝船舟）’のようなものを作ることを指したことがわかる。

日本語の「イカダ」《筏》が「イカ」《角ばったもの》と「イタ」《板》の合成語であるすれば、これは、角ばった板を組み合わせたというよりも、材木を組み合わせた結果、巨大な板のような形に見えたからそう呼ばれたのではないかと考えられる。この「航」*xaŋ* は、日本語の「イカダ」《筏》の「カ」の部分と比較できるかもしれない。日本語のア行の「イ」の一部は、この『維甲令』の言語では、*ki* (= \**qi*) のような音に反映されているようである。これは声門閉鎖音 *i* (= \**ʔi*) がさらに緊張した状態になって \**qi* のような音になったのであろう。

「稽繇」(上 *kj̥er.dij̥og* / 中 *kj̥ei.iɛw*) 修正形 \**qi.[r]ei.iaw* < \**i-ra.ji+ja.u* 《人 (<入?)》(日本語、「イ・ル」、命令形「イレ・ヨ」《入》)  
「亟怒」(上 *kʰi̯og.no* / 中 *kʰji.nuo*) 修正形 \**qig[ɑ].[n].na* < \**ika[-ri]+na* 《怒》(日本語、「イカリ」《怒り》、「～ノ」《[格助詞・属性]～の》)

したがって、「イカダ」の「イ」は *ki* のような音になることが推定される。山東省東部の古代地名には、「箕」(上 *kj̥өг* / 中 *kji*) 修正形 \**qi[g]* 《舟》の形が得られるものがある。

許慎、呂忱云「澠水、出箕屋山」。『淮南子』曰「澠水、出覆舟山」。蓋廣異名也。(許慎、呂忱は「澠水は箕屋山より出 [い] づ」といふ。『淮南子』にはく、「澠水は覆舟山より出づ」と。けだし廣き異名なり。)〔水經注疏、二十六、澠水〕

「箕屋」《覆舟》の「屋」は、それと共通の声符、「渥」「握」から判断すると、\**ak* のような音にさかのぼり得る。「箕屋」\**qi[g].ok* は \**qi*.

[g]ɔk で、うしろの \* [g]ɔk はさらに \*kək- にさかのぼり、k の音の直前の p の音が k に同化する傾向を考慮に入れれば、日本語の「カヘ・ス」《返、反》の語幹（「カヘ〜」 < kafe-）と比較できるかもしれない。同じような現象は 4 行目の《勇士》を意味する「高文」の「高」でも見られる。

「屋」 \* [g]ɔk < \*kək- < \*pak- < \*ka.p[ia]- 《覆》

そこで、「箕」 qi[g] と「航」 xaŋ は、それぞれ第一音節と第二音節を残して省略した形である可能性を提案したいと思う。『越絶書』の逸文に引用された『伍子胥水戦兵法内傳』に見える船名、「大翼」「中翼」「小翼」の「翼」（上 giək / 中 iək）修正形 \*ik も、別の経路で呉国に伝えられたものであろう。

\*[qi]gaŋ[.qida] < \*ika+n[a] 'ita

このように、二音節語の第一音節と第二音節をそれぞれ別々に省略する例は、越の言語では《官》をあらわす「朱」と「姑」でも見られる。これはそれぞれ日本語の「ツカ・サ」《官、司》の「ツ」と「カ」に酷似している。

姑中山者、越銅官之山也。越人謂之銅姑瀆。…朱餘者、越鹽官也。越人謂鹽曰餘。（姑中山なる者は、越の《銅官》の山なり。越人これを「銅姑瀆」といふ。…「朱餘」なる者は、越の《鹽官》なり。越人《鹽》をいひて「餘」といふ。）〔越絶書、八・越絶外傳記地傳、第十〕

「姑」（上 ko / 中 kuə）修正形 \*kə 《官》

「中」（上 tiəŋ / 中 t̪iəŋ）修正形 \*tiəŋ < \*diəŋ? 《銅》

「朱」（上 t̪iə / 中 t̪iə）修正形 \*t̪iə 《官》

「餘」（上 diə / 中 iwo）修正形 \*diə < \*dra? 《塩》

上の例を見る限り、江南地域の（本来の）越語は、『維甲令』の言語とは修飾語と被修飾語の語順が異なっていたことがわかる（「官・銅」《銅官》、「官・鹽」《塩官》）。また、呉王僚の別名「州于」の存在から、古い時代の呉語を通じた借用という可能性もある。



「州于」(上 t̚iŋg.gijwo / 中 t̚jəu.jju) 修正形 \*t̚ug.giä < \*tuki.[h]a?  
《僚》

《方舟》と「航」が同じものを意味していたとすれば、これは日本の古い漢文の読み方、‘文選（もんぜん）読み’に似た用法ではないだろうか。たとえば、「片時 [ヘンジ] のかたとき」や「豺狼 [サイラウ] のおほかみ」のように、はじめに漢語を音読して、その直後にそれに相当する語句を和語で説明する方法である。ここでは「方舟 (の) 航 (は)」、あるいは「方舟 (すなわち) 航 (は)」というような解釈になろう。

### 3. 「治須慮」

「須慮」は、原注では《船》をさすという説明がされている。しかし、この行のはじめに見える「方舟航」の「方舟」と「航」がいずれも《船》をあらわし、「航」は《方舟》の‘訓読’、あるいは訳語であると考えられるので、さらに「須慮」を《船》とすると、文章の技巧上、かなりくどい表現になるのではないか。その反面、《治》に対する訳語が示されないことになり、文の内容のバランスが悪くなるという印象は避けられない。また、揚雄の『方言』には呉越を含む江南地域の《船》をあらわす古代言語が採録されているが、「須慮」や、それに近い語形ではない。

東南・丹陽・會稽之閒、謂𦨇爲𦨇。 (東南・丹陽・會稽の閒、《𦨇 [= 小舟]》をいひて「𦨇」となす。) [方言、九]

𦨇溪城者、闔廬所置船宮也。闔廬所造。(「𦨇溪城」なる者は、[吳王] 闔廬置くところの《船宮》なり。闔廬造るところなり。) [越絶書、二]

この「𦨇」「𦨇」(「レイ」 liei < \*lieg) が、古代の江南地域で《船》をあらわす一般的な名称であったと考えられる。「須慮」の「慮」(liə) はそれに似ていなくもないが、やや距離があるように思われる。また、「須」は何かという問題も新たに発生する。なお版本によっては、「須」を「湏」(カイ < クワイ < \*xwəi) としているものがある。東洋文庫の

蔵書では、上海涵芬樓の明刊本の影印（請求記号 II-6-19）と『増訂漢魏叢書』（請求記号 E-V-5-B-0001）所収のものがそれであるが、単純に「須」の誤記、誤刻か、‘くずし字’と考えていいと思う。すくなくとも、「湏」の方が本来の字であるとする積極的な理由は見当たらない。

これも‘文選読み’のようなものと考えれば、「須慮」は「治」の誤語（治＝須慮）を示したものとなろう。「治」には《管理する》や《修理する》といった意味があるが、それ以外にも《作る》《なす》という意味があり、原注の「船」は、あるいは「舩」（「造」の古字）の誤記・誤刻の可能性も考えられる。

能多者、無不治也。【注；治、猶作也。】…（能の多き者は、治 [な] さざる無きなり。【注；「治」は、なほ《作》のごときなり。】…）  
〔淮南鴻烈集解、九「主術訓」〕

「治船」という熟語であれば次のようなものがある。

築倉治船、費直二萬萬餘。…（倉を築き船を治 [つく] る、費 [あたひ] 二萬萬 [=億] 餘に直 [あた] る。…）〔漢書、二十四「食貨志」四・上〕

「須慮」が《船を造る、いかだを組む》、あるいは《船を並べて浮き橋を造る（＝舩舟）》という動詞であれば、この3行目の文全体が自然な解釈になる。これは、日本語の「シ・ヨリ」《仕寄り》と比較できるかもしれない。その場合は、塀や櫓のような攻城の際の臨時的構築物を指すことばであるが、本来は、材木などを紐や縄などで結んで固定することを言ったのであろう。「シ」は「ス」《する》の連用形であるが、「ヨリ」は「ヨル」《寄》ではあるまい。もし《寄》であれば、他動詞は「ヨス」（連用形は「ヨセ」）となるので、「ヨリ」は「ヨル」《繕、撚》の連用形であろう。あるいは、「治」のうしろに「～シ」という動詞を付加した形（「治シ」）にしたという可能性もある。

「須慮」（上 sju.lijo / 中 sju.liwo）修正形 \*s'u[ə].r'i.ä

< \*si jüä.rija < \*si dö-ri+ja

この「須慮」の漢字音、特に「慮」の母音は、上古音 ljo / 中古音 li wo よりも広く、liä (= \*riä) に近い音を推定した方が他の変化例と整合性のある説明ができる。上代日本語動詞の「四段活用」の命令形の母音は、「エ列甲類」となるが、これは (e < \*ia < \*ija) のような形のさかのぼると考えられる。おそらく、動詞の連用形に相手の行動をうながす感嘆詞が付加されたものが起源ではないかと思う。

\*-riä < \*-ri+ja!

この「治須慮」の解釈は原注と異なることになるが、「方舟＝航」である以上、「治須慮」は「治＝須慮」と解釈した方が合理的ではないか。おそらく、原注の作者は「治須慮」全体を《治船（＝船を造る、いかだを組む）》という動詞として解釈すべきところを、単純に「治」を除いた「須慮」を《船》であると認識したのであろう。

#### 4. 「使之維甲」

《治》ということばを説明したついでに、本文の2行目、『維甲令』の最初の「維甲」について論じて見たい。これは、原注では《治甲》を意味することを示している。単純に解釈すれば、「維」が《治》をあらわし、「甲」が漢語の《甲》をあらわしているように見えるが、この「維」も古代の山東半島の地名に見られる。

[膠水] …又北過夷安縣東。【縣、故王莽更名之原亭也。應劭曰「故萊夷維維邑也」。太史公曰「晏平仲、萊之夷維之人也」。】（[膠水] …また、北のかた夷安縣の東を過ぐ。【[夷安] 縣は、故、王莽更名[名をあらたむる]の「原亭」なり。應劭いはく、「もとの萊の夷維邑なり」と。太史公いはく「晏平仲、萊の夷維の人なり」と。）[水經注疏、二十六、膠水]

齊の宰相晏嬰 [=晏子] は紀元前6世紀後半に活躍した人物であるから、それ以前からこの地名が存在していたことがわかる。「夷維」と《夷

安》の対応から、「維」が《安》を意味したことがわかる。もし、《夷を安んずる》という意味であったとすれば、目的語 (O) 「夷」が動詞 (V) 「安」の前に置かれる構造になる。《夷が安んずる》という解釈も成り立ち得るが、その場合は、萊夷という異民族がこの地域を支配していたということになる。

『維甲令』のこの部分が漢文的に動詞 (V)・目的語 (O) の語順になっているのは、直前の「使之〜」《これをして〜せしむ》という漢文の用法に接続しているため、それにあわせた構造になったのであろう。またこの用法は、この文を編集した後世の記録者の‘間接話法’的な表現を反映する効果を与えている。

前に述べたように、《治》には《管理する》、《修理する》、《作る》と  
いう意味があり、「維」(上古音 *d̪iwər* / 中古音 *ɣwi*) 修正形 *\*juəi* は、  
日本語の「ヨル」(連用形「ヨ・リ」 $< jō-ri$ ) 《縊、撻》と対応するかも  
しれない。ちなみに、日本語の「ヨロヒ」( $< jōrō-fi$ ) 《鎧》も鉄板や皮  
などを紐や糸で綴じ合わせたものであることから、「ヨ・ル」《撻、縊》  
と関係があり、その名詞化したもの(連用形)であると考えられる。

次の「甲」は、漢語からの借用語でなければ、日本語の「カハ」《皮、  
革》に酷似している。牛などの皮を糸や紐などでつなぎあわせたもの(=  
皮甲)を表現したのであろう。後でふれることになるが、この言語では  
名詞の目的語をあらわす場合には +i という対格(《〜を》)の接尾辞が  
付加されるようである。もし、「甲」*\*kap* が動詞「維」*\*juə.[r]i* の前に  
存在していた場合、+i はうしろの半母音 *j* に融合して、消滅してしまっ  
たのかもしれない。

*\*kapa+i dō-ri > \*kap[ä].j jüä.ri > kap[] jjuə.[r]i > \*juə.[r]i kap*  
(語順の転倒)「維甲」

## 5. 「系斷」

この「系斷」を前の「治甲」と合せて漢語として解釈する意見がある。  
例えば、張宗祥校注『越絶書』第3巻(1956年上海商務印書館排印本。  
東洋文庫蔵書の請求記号 II-6-29)の注でもそうなっている。確かに

「維」には漢語で《つなぐ》という意味があり、「系」も「繫」と同じく《つなぐ》と解釈できる。したがって、「系斷」を《断たれたるを繋ぐ》と読めないことはない。しかし、「維甲」と‘対句’的な表現にしようと思えば、「斷」ではなく、むしろ「甲」に対応する概念のこぼをそこに当てはめるのが適当ではないか。本来、非漢語であった文を無理に漢語で解釈しようとしているという印象は否めない。

「系」は、うしろの「赤鷄」の「鷄」と同じく《鍛 (=大矛)》と対応することばであり、「系斷」は、直後の「修内矛」の‘訓読’と考えた方がいいと思う。ただし、「修内矛」では意味が不明である。この「内」を「納」の誤記、または省画形と見ることもできるかもしれないが、やはり不自然な解釈になろう。《矛を修理して納める》であれば、「修矛(而)納之」のような表現に、《納められた矛を修理する》であれば、「修所納之矛」のような表現になるのではないか。筆者は、「内」は「大」の誤記であろうと考える。篆書に近い書体では「大」の両腕の部分は下に垂れ下がっており、それによって「内」のような形として認識されるようになったと見られる。「修大矛」であれば、《大型の矛を修理する》という自然な解釈になる。

なお、刊本によっては、「修」を【一作循】(あるいは‘循’に作る)という注釈が付されたものがある。東洋文庫に所蔵されているものでは、『増訂漢魏叢書』(請求記号 E-V-5-B-0001) および『古今逸史』(請求記号 貴XI-3-A-e-13) 所収のものがそれであるが、本文で「循」と表記しているものは見当たらない。「循」は《したがう》という意味があり、「循大矛」としても意味が不明である。この字は、おそらく「甲」(よらい)に対する「盾」(たて)との連想から生じた‘類推’(analogy)に基づく誤記・誤刻であろう。

この「系」は、日本語の「ホコ」《矛》と比較できるかもしれない。揚雄『方言』(卷九)では、前漢末期の中国各地の‘方言’で、《矛》やそれに類した武器の名称が伝えられている。

戟、楚謂之矛。凡戟而無刃、秦・晉之間、謂之矛、或謂之鎡。吳・揚之間、謂之戈。東齊・秦・晉之間、謂其大者曰鋌胡、其曲者、謂

之鉤鈇鋌胡。… (《戟》、楚 [にては]、これを「矛」いふ。およそ戟にして刃なき [もの]、秦・晉の間 [にては]、これを「矛」といひ、あるいはこれを「鎗」といふ。呉・揚の間 [にては]、これを「戈」といふ。東齊・秦・晉の間 [にては]、その大なる者は「鋌胡」といひ、その曲れる者、これを「鉤鈇鋌胡」といふ。…)

矛、呉・揚・江・淮・南楚・五湖之間、謂之鎗、或謂之鋌、或謂之鏃。其柄謂之矜。(《矛》、呉・揚・江・淮・南楚・五湖の間 [にては]、これを「鎗」といひ、或いはこれを「鋌」といひ、或いはこれを「鏃」といふ。その柄、これを「矜」といふ。)

これらの中では、「矛」(上 *kjæt* / 中 *kjɛt*) 《戟》が比較的「系」の音に似ているが、語末子音の違いが説明できない。《矛》を意味する江南地域のことばは、「系」とはまったく異なっている。ただ、「鎗」を「施」(上 *ciɑ* / 中 *ciɛ*) と読んだ場合、「系」(上 *gʷieŋ* / 中 *ɣiei*) に似ていなくもない。一般的に、*xi* (ヒ) の音が *ci* (シ) の音に変化することはあり得る。『維甲令』の文章では *ki* (キ) の音が *tci* (チ) の音に変化した例が見られるので、それと平行した現象と言える。しかし、逆に、なぜこの「系」だけ「古い音」(*ɣiei*) が維持されているのか、それが合理的に説明できない。むしろ「戟」(上 *kjäk* / 中 *kjɛk*) の方が「系」の音に近いとも言える。

この『維甲令』の言語では、漢字の頭子音を除いた母音群(韻母)が *ie* の場合、上代日本語の「エ列甲類」の音 (*e*) に対応するものと、「オ列乙類」の音 (*ö*) に対応するものがある。したがって、ここの *ie* は修正形を *\*æ* (< *\*ä*) とすることが可能で、上代日本語の「ホコ」(< *fokö*) の「コ」と対応し得る。「ホコ」の「ホ」は、「甲」(*fo*)「乙」(*fö*) の区別は不明であるが、「コ」が単独であられることはないので、「ホコ」は不可分の単語であろう。また、*k* の直前 *p* の音が *k* に同化し、さらに重音の省略 (haplology) で単音節化している点も推定できる。

「系」修正形 *\*[gæ]gæi* < *\*käkä+i* < *\*päkä+i*

これも上古音よりは中古音に近い音で表記された可能性が高く、*\*gæi* のうしろの *\*+i* は対格 (《~を》) の接尾辞であると考えられる。上代日

本語の格助詞「～イ」は主格《～が》をあらわす場合が多いが、対格をあらわしたと思われるものも見られる。

美都美都斯 久米能古賀 久夫都都伊 伊斯都都伊母知 宇知弓斯  
夜麻牟。(みつみつし 久米の子が 頭椎 石椎もち 撃ちてし止  
まむ。)〔古事記、中巻、歌謡11〕

この「久夫都都伊 (くぶつつい)」「伊斯都都伊 (いしつつい)」「石椎」のそれぞれ語末の「～伊」(イ)は、あきらかに動詞「母知 (もち)」「持」の目的語をあらわす対格の機能を有している。モンゴル語にも対格接尾辞 *-i* (母音のあとは *+yi / +gi*) の存在が知られているが<sup>(4)</sup>、上代日本語にも同じ形の接尾辞が存在していた点は興味ぶかい。

次の「斷」(*dʷan*) 修正形 *dwan* 《修》は、日本語の「トグ」《研、磨》に酷似している。「ト」の母音は上代日本語では「オ列甲類」の「オ」(*o / ɔ*) になり、「乙類」(*ö / ə*) よりも広い音であったことが推定される。この動詞の語幹は *\*dwanŋ-* のような形になることが推定されるが、語幹末の鼻音が *ŋ* ではなく *.n* になっているのは、連用形「トギ」(*\*tuaŋ-ki*) および命令形「トゲ」(*\*tuaŋ-ki.ja*) にあたる形の *-ki* という軟口蓋音が硬口蓋化して *-ci* のような音に変化したため、その影響で直前の *ŋ* も *.n* に変化したのであろう。おそらく、次の「赤鷄」の「赤」*ciäk* の語末子音 *.k* を除いた部分と接続して、命令形を構成していたことが考えられる。

*dwan.ciä[+k] < \*tuaŋ-ki+ja*

この『維甲令』の文章は、長らく口伝えで伝承されてきたと考えられるが、後世になって漢字で表記する際に、いわゆる「誤分析」が生じたのであろう。あるいは、伝承者自身が本来の意味を離れて、韻文調の歌の形で記憶していたのかもしれない。同様の現象は、4行目の「怒至士撃高文」《躍勇士》の前後でも見られる。「赤」は、一応 *\*ciäk* (上 *kʰjak* / 中 *tejek*) としておいたが、それよりも古い音であった可能性を示す資料もある。

「郝」、右扶風鄠、鰲屋郷。从邑赤聲。（「郝」は、右扶風の鄠 [コ]・鰲屋 [チウツツ] の郷なり。邑にしたがひ、赤の聲なり。）〔説文、六・下、邑部〕

共通する声符の「郝」xāk が「赤の聲」とされていることから、古い時代の「赤」の発音は \*kiäk < \*krak / \*klak に近いものであったかもしれない。ただし、『説文解字』が後漢時代の成立であったとしても、その元になった資料がそれよりはるか以前に記録されたものに基づくのであれば、それをもって後漢時代の漢字音が‘上古音’であったとは断定できなくなる。

たとえば、『康熙字典』には漢字の発音を示す「反切」（ふたつの漢字の声母と韻母を組み合わせるシステム）が付されているが、これが清の康熙帝の時代の北京の発音を反映しているわけではなく、それより数百年も古い韻書に基づいていることが思い起こされる。当時の中心的な都市で公的に刊行された出版物であれば、伝統的な古い漢字音が正統なものとしてされたかもしれないが、私的な著述では、その作者が生活基盤を置く地方の、変化をとげた発音が採用された可能性は否定できない。前漢時代末期の中国の言語状態を記録したと言われる揚雄の『方言』（巻一）にも興味ぶかい例がある。

…京樊將、大也。…燕之北鄙、齊楚之郊、或曰京、或曰將。（…「京」、「樊」、「將」は、《大》なり。…燕の北鄙、齊・楚の郊、あるいは「京」といひ、あるいは「將」といふ。…）

《大》を意味することばとして、本来、「京」kiāŋ と発音すべきものを、硬口蓋化して「將」tciāŋ のように発音していた地域が、すでに前漢時代に出現し、しかも同じ地域で共存していたことがわかる。なお、「京」は共通の声符の「涼」「諒」liāŋ の存在から、\*kl'ɑŋ / \*klaŋ の音を再構できる。また、同じ巻の東齊の方言、「劔」（< \*kl'äm）《大》を考慮に入れば、\*lam+ka のような音を再構できる。ちなみに、日本語「ナガ・シ」《長》の語幹「ナガ」も、これと遠い関係にあるかもし



れない。

「將」 tɕiaŋ < 「京」 kiaŋ < \*k[ɹ]l'aŋ < \*laŋ.k[a] < \*lam+ka > \*k[ɹ]l'am  
> 「劍」 kiäm

現代の日本語の方言でも、「キ」の音が「チ」のような音に変化した現象が見られる地方があるが、中世以前にこのような音韻変化が起こった形跡はない。わかりやすく言えば、『維甲令』で使われた言語が、そのまま日本語の‘祖先’になったということは考えにくいということである。

## 6. 「赤鷄稽縶」

原注では《人鍛（也）》となっているが、これでは意味が不明である。「人」は、おそらく「入」の誤記とするのが正しい<sup>(5)</sup>。それも自動詞《入る》ではなく、他動詞《入れる》が意味的に妥当であろう。

「鍛」は《大矛》、あるいは《長矛》という意味であるので、前述の「系」と「鷄」は同じ意味であると考えられる。また、「人鍛也」の直前の「赤鷄稽縶者也」の「也」は衍（えん）字か、「者」と「也」の間になにか別の語句があって脱落したのかという印象を受ける。あるいは、「也」は語勢を強める助辞という解釈もあるかもしれない。

「系」の頭子音（声母）が g' / γ（上 g'ieg / 中 γiei）の音であるのに対し、「鷄」が k（上 kieg / 中 kiei）となっているのは、直前の「赤」\*ciäk の語末子音 k と接続していたため、\*k > \*g（または \*γ）の変化を被らなかったのであろう。「赤」の語末子音を除いた前の部分（\*ciä）は「斷」と接続していたと考えられる。したがって、「鷄」を修正した発音は、\*[k]kæi という形が得られ、これは更に \*k[ä]käi < \*päkä+i 《大矛・を》のような形を再構することができる。ここでも、k の直前の p の音が k に同化される傾向にあることが見て取れる。

うしろの「稽縶」の「稽」には「槩戟」《官吏が用いた儀仗の一種》と「計兵名籍」《兵器を数えて帳簿に記入する》という解釈がある。

行頭皆官師、擁鐸拱稽、…【唐尚書云「稽、槩戟」。鄭司農以爲

「稽、計兵名籍也」。『周禮』「聽師田以簡稽。」(行頭 [=行列の長] は、みな官師 [=官吏の長]、鐸を擁 [いだき] 稽を拱 [とり]、…【唐尚書「稽は、檠戟なり」といふ。鄭司農おもへらく「稽は、兵を計り、籍に名づくるなり」と。『周禮』に「師・田 [=出征と田獵] を聽き、もって稽を簡にす」と。】『国語』「呉語」第十九、呉王昏乃戒…)

「鷄」が《鍛 (=長矛・大矛)》を意味したとすれば、「稽」が《檠戟》では同じような矛状、棒状のものとなり、表現がくどくなる。むしろ、《帳簿に》記入する、あるいはもっと単純に《武器庫に入れる》とした方が合理的に解釈できる。すなわち、先に《大矛を修理せよ》という命令を出し、引き続いて、すみやかにその大矛を《帳簿に》記入せよ、あるいは《(武器庫に) 入れよ》という命令になったのではないか。

「稽繇」の「稽」は、日本語の「イ・ル」《入る》(正確には他動詞の命令形の語幹「イレ〜)と対応する。うしろの「〜繇」は、上の日本語の命令形「イレ・ヨ」の「〜ヨ」と比較できる。これも中古音に近い音の方が説明できよう。

「稽繇」(上 *kiər.djog* / 中 *kiei.iəw*) 修正形 *\*qi.[r]ei.iəw* < *\*i-ra.ji+ja.u*

上代日本語の「下二段活用」の命令形は「エ列乙類」(ë) で終わる語幹(連用形)に、「オ列乙類」の「〜ヨ」+jö という要素が付加されたものと考えられる。-ë は *\*-ai* にさかのぼり得るので「イ・レ」の「レ」も *\*-rai* < *\*-ra.ji* のような形にさかのぼり得る。次の +jö は *\*+ja.u* のような形にさかのぼるかもしれない。

## 7. 「亟怒紛紛」

次に4行目の「亟怒紛紛」《怒貌》は、「亟怒」が《怒》で「紛紛」が《貌》であろう。「亟」*kiæg* (= *\*qi[g]*) は日本語の「イカリ」《怒り》の第一音節「イ」と対応する。これまでも言及したように、日本語のア行音「イ」の一部は『維甲令』の言語では *ki* (= *\*qi*) と対応している。

「イカ・リ」《怒》の「イカ」は、「イカダ」《筏》、「イカ・シ」《巖》の「イカ」と同じく、「角ばった(もの)」を意味する要素であろう。前の「航」《方舟》が「イカ」の第二音節の部分にあたるのに対し、この「亟」は第一音節の部分であろう。

連用形の語尾は、この言語では収縮、あるいは消滅する傾向が見られ、「イカ・リ」の「～リ」(-ri)は、直後の「怒」(no)の鼻音 n に同化し、消滅した可能性が高い。「怒」は「亟」を説明したことばのようにも見えるが、属性をあらわす格助詞「～ノ」(< +nō < \*+nä)、あるいはその別の形「～ナ」と対応するかもしれない。

「亟怒」(kiəg.no) 修正形 \*qig[a.n].nə < \*qigə[n].nə < \*'ika[-ri]+na? 《怒り・の》

《貌(かお)》をあらわす「紛紛」は、日本語の「ホホ」《頬》か「カホ」《顔》の「ホ」(「カ～」は接頭辞か?)と対応するかもしれない。ただし、奈良時代(8世紀)の段階では、「ホ」は fo (甲類)か \*fö (乙類)かの区別が失われている。

「紛紛」(p'iuən.p'iuən) 修正形 \*puən.puən < \*püän.püän < \*pön.pön?

同じことばの繰り返しは、複数か集合名詞をあらわしたもののように見える(「山々」「人々」等)。

## 8. 「怒至士撃高文」

これは、原注では《躍勇士》となっているが、「怒至士撃」が《躍》で、「高文」が《勇士》であると考えられる。さらに、「怒至士撃」は「怒至」と「士撃」の、「高文」は「高」と「文」の、それぞれ別の要素に分けられる。

「怒至」(上 no.tiəd / 中 nuo.tci) 修正形 \*[n+]dɔ[c].ci < \*tat.ti < \*tat-ri

この「怒至」は、日本語「タツ」《発、起、立》の連用形「タチ」と比較できる。語頭の「怒」(no / nuo)が鼻音になっているのは、直前にある「紛紛」の語末子音 .n の影響であろう。また no の母音は、古

い時代には o よりも広く、a に接近していた可能性が高い (\*na < \*N.da)。

「士撃」(上 dz̄i.ïəg.kiek / 中 dz̄i.kiek) 修正形 \*ʒik.[]iä[+k] < \*ʒik-ri.ja / \*sik-ri.ja ?

これは《追いつく、重なる》という意味の日本語「シク」《及、頻》の命令形、「シケ」と比較できる。「撃」の語末子音 .k は、この直後の「高文」の語頭に接続すべきものであろう。ここも後世に記録化された時点で‘誤分析’が生じたのかもしれない。また、「撃」kiek の頭の ki が ci (=tci) に変化していないのは、k と i の間に何らかの子音(おそらく \*r) が存在したことをうかがわせる。「怒至士撃」は日本語の「タチ・シク」《頻りに、次々と立つ》という意味の動詞の命令形に対応し得る。

《勇士》をあらわす「高文」の「高」(上 kog / 中 kau) は、直前の「撃」の語末子音とあわせて \*[k]kaw のような形を再構することが可能である。これは日本語の「コハ・シ」《剛、強》の語幹 (< köfa-) と対応し、音位転換 (metathesis) が起こったことが推定される。ここでも k の音の直前の p の音が k に同化する傾向を示している。また、「稽繇」《入れよ》の「～繇」の項でもふれたが、.aw の韻をもった音は、上代日本語の「オ列乙類」の「オ」(ö) と対応する可能性を示している。

「高」 \* [k]kaw < \*k[ã]kaw < \*pakau < \*kaupa

次の「文」は、あきらかに日本語の「モノ」(< mönō) 《者、物》と対応し得る。この言語の .juə の韻をもった音も、「維甲」《治甲》の「維」の項でふれたように、上代日本語の「オ列乙類」の「オ」(ö) と対応する。

「文」(上 mjwən / 中 mjüən) 修正形 \*m'üən < \*müän < \*mön[ö]

日本語の「ツハモノ」《兵》の「ツハ～」(< tufa-) は、「ツヨ・シ」(< tu[jö]-si) 《強》と「コハ・シ」(< [kö]fa-si) 《剛》の語幹の合成形のように見える。

## 9. 「習之於夷、夷海也。…」

この5行目の部分は、前の三行(2行目の冒頭を除く)と比べて性格

が異なっている。すなわち、前の三行が訳注を除き、基本的に‘非漢文’であるのに対し、1行目とこの行は漢文の用法で構成されている。

また、ここに出現する地名、あるいは民族名「夷」「萊」は、現在の山東省付近のものであり、呉国を打倒する前の越にとって、どれだけ視野に入っていたのか疑問であるが、呉国滅亡後、山東半島南部の瑯琊（ロウヤ、または「琅邪」など）に遷都したあと（周貞定王元年＝前468）であれば、その付近に存在する身近なものになる。

[周貞定王] 元年癸酉、於越徙都瑯琊。（[周の貞定王の] 元年癸酉 [みづのととり]、於越、瑯琊に都を徙 [うつ] す。）[竹書紀年、卷下]

ただし、これらの表現は、前5世紀当時の状況を記述したというよりも、後世の人間が越の武人の祖先たちの‘功績’をたたえた回想のように見える。そのため、前の3行（＝2～4行）とは別に、後になってから加筆されたものではないかという疑いが残る。漢文的な記述も、非漢文的な言語による創作・翻訳が不可能になったことがその理由であろう。それは、越が呉（現在の蘇州）に遷都した前379年の時期がその契機となったと考えられる。

[周安王] 二十三年、於越遷于呉。（[周の安王の] 二十三年、於越、呉に遷 [うつ] る。）[竹書紀年、卷下]

「習之於夷」は、そのまま読めば《之を夷に習ふ》ということになる。「習」は軍隊、特に水軍の演習を述べたものであろう。それでは「之」は一体何を意味するのであろうか。本文1行目に掲げた「士民之衆」（士大夫と人民大衆？）であれば、「習」は《習はしめ》のように使役的な表現になろう。ただし、2行目の「系斷」から4行目までは命令、または呼びかけのような‘直接話法’的な体裁をとっているのに対し、この行は越の「士民」に対する呼びかけではなく、後世の編者が彼らの行為を間接的に叙述したような印象を受ける。

もし、この文章が‘過去の回想’をあらわしていたとすれば、「～之」は《過去の回想》をあらわす日本語助動詞の終止形「～キ」（漢語動詞に接続する場合は「～シ・キ」）《～した（ものだ）》に近い用法になるが、不確実性が残ることは認めなければならない。

「～之」（上 t'jəg / 中 tci）修正形 \*[-c].ci < \*[-s'].ci < \*[-si]+ki

「夷」には《海》という意味が与えられているが、「夷海」は、単純に《東方の異民族の住む地方の海》という解釈でいいと思う。あるいは『説文解字』（卷十一・上、水部）の「海、天池也。以納百川者。…」（海とは、天の池なり。もって百川を納むるものなり。…）という解釈であれば、《沃（そそぐ）》を意味する日本語「イ・ル」（連用形「イ」）と酷似している。

「夷」上 d̥jər / 中 i // 修正形 \*jir < \*dir

次の「宿之於菜、菜野也」の「宿」は《宿営する》という意味であろう。「菜」は《野》という解釈が与えられているが、この「菜野」も、単純に《菜夷という民族が住んでいる野》と解釈していいのではないかと思う。『説文解字』（卷十三・下、里部）の「野、郊外也。…」（「野」とは、《郊外》なり。…）という解釈を考慮に入れば、日本語の動詞「アル」《荒、散》の連用形「アレ」、あるいは《村》の古語「アレ」と似ていると言える。

「菜」（上 ləg / 中 lǎi）修正形 \*[a]lai < \*alai / \*arai

最後の「致之於單、單者堵也」の場合、「單」はあきらかに《堵（= 垣）》を意味していたと考えてよい。「致」は、「イタス」という他動詞以外に、「イタル」《至、到》という自動詞として使われることもあったようである。

堵垣也。五版爲一堵。从土者聲。…（「堵」とは、《垣》なり。五版を一堵となす。土にしたがひ、者の聲なり。…）〔説文解字、卷十三・下、土部〕

この「單」も現在の山東省方面に存在したと考えられるが、もし、これが「齊の長城」をさしたとすれば、すくなくともこの5行目の文は、

呉（蘇州）への遷都よりさらに後の、前351年（＝周顯王18年）以降に成立した可能性が高くなる。

〔周顯王〕十八年、齊築房以爲長城。（〔周の顯王の〕十八年、齊、房を築き、もって長城となす。）〔竹書紀年、卷下〕

「房」は「防」と同じく、牆壁や土塁をさしていたのであろう。「單」  
tan は \*ta+n のような要素に分解できる。\*ta が「堵」（上 to / 中 tuo）  
の古い音でなければ、高句麗語の「吐」to（＝\*tʌ）《堤》、日本語の  
「タ」《田》と比較できる。本来は《貯水池》から変化したものと考えら  
れるが、意味的には高句麗語に近い。うしろの +n は、日本語の格助詞  
「～ニ」にあたる要素が化石的に残ったものかもしれない。「於～」とい  
うのはその場所に存在すること（英語の前置詞 in, on, at に相当）を示  
すことばであるのに対し、「致之於～」では《～に致す、～に至る》と  
いう動作の目標（to に相当）を示すものになり、役割が異なる。したが  
って、前二者「夷」「萊」には接尾辞を付加せず、「單」に付加してい  
るのは、こうした意味の違いを明確にする目的があったからではないか  
と思う。

## 10. 「越王句踐反國六年…」

順番は最後になってしまったが、実際の文章も、この1行目の背景説  
明の文、および訳注が最後に付け加えられたと考えられる。この本文と  
ほぼ同じ記事は『史記』にも見える。

句踐自會稽歸七年、拊循其士民、欲用以報呉。…（句踐会稽より歸  
りて七年、その士・民を拊循 [=なで・やすんず] し、用ひて以っ  
て呉に報いんと欲す。）〔史記、四十一、越王句踐世家第十一〕

会稽で降伏し、呉に連行された越王がふたたび越に帰還してからの年  
が「六年」と「七年」で、一年の違いがあるが、『左傳』では魯の哀公

の元年に会稽山での降伏があり、22年に越は呉を滅ぼしているの、実際の‘雪辱’の実現には長い準備期間を費やしたことがわかる。なお、『竹書紀年』（巻下）では越が呉を滅ぼした年は、周の元王4年（前472）となっている。この1行目の文章には、人名「句踐」のような固有名詞以外に非漢語要素が存在しないので、本論考の分析対象とはしない。

## あとがき

今回本論考では、議論の進め方としては、日本語に酷似した部分（「買儀塵」《往如江》）から説明を始めたが、研究方法としては、他の多くの消滅した言語の解読方法を応用している。それは2回（以上）出現する単語、文節のかたまり（ここでは《治》《矛》といった要素）を見つけて、その音価を推定することである。また、『維甲令』という性格から、動詞の命令形の活用語尾も検証した。

今回わかったことは、本文の漢字音が上古音よりも中古音に近い音（より単純化すれば、母音は上古音に近いが、子音は中古音に近い）で読まれた点をあげることができる。これは、この文章が長らく‘口伝’という形で語り伝えられてきたものを、漢代（？）に入ってから文字で記録化されたのではないかと思われる。そのため、伝えられた音を機械的に漢字で表記し、さらに韻文的な体裁にまとめようとした結果、漢字の区切りと実際の語の分析に齟齬が生じた、いわゆる‘誤分析’の状態が生じたのであろう。

量の少なから完璧な分析はできなかったが、音韻変化についてのいくつかの法則や、格助詞や動詞の活用など、ごく簡単な文法的要素の抽出ができた。まず、音韻面では上代日本語より古い音を伝えている部分もある。特に、「オ列乙類」の「オ」(ö) が三種類の別の音にさかのぼり得る点である。

\*aw < \*au || \*æ < \*ä || \*üä < \*ö

逆に、現代日本語と比べても明らかに激しい音韻変化を経た部分が見られる。たとえば、日本語のア行の「イ」(i) が ki のような音に、「キ」(ki) の音が ci のような音に変化している点、k の直前の p の音が k



に同化している点、無声音の一部が有声音になっている点（\*k > \*g || \*t > \*d）などである。そして、単音節化が進んでいる点もこの言語の特徴と言えよう。

また、文法的要素も名詞のうしろに助詞（テニヲハ）を付加したもの、動詞（特に命令形）に活用語尾を付加したものが見られ、いわゆる‘膠着語’の特徴を示している。参考までに、巻末に付録としてそのサンプルを提示したいと思う。また、日本語と同じく、基本的には主語（S）目的語（O）動詞（V）の語順になっている。

そして、この文章の非漢語的要素（本文2行目の「維甲」から4行目の終わりまで）と漢語的要素（同1行目と5行目）では成立の時期が異なっているのではないかということも推定できる。筆者は、非漢語的要素を、その東夷系言語の地名との共通性から、越が瑯琊に遷都した時期（前468年）以降、呉（現在の蘇州）に遷都する時期（前379年）以前に創作されたか、‘原越語’から翻訳されたものと考えている。一方、漢語的要素の方は、‘齊の長城’に関する記述の存在から、それが建設され始めた前351年以降に新たに加筆されたのではないかと推定している。そして、最後に1行目の背景説明文と訳注が付加されて完成したと考えられる。

筆者は一貫して『維甲令』の非漢語的要素を‘越語’と呼ぶことに慎重であった。それは、この言語が東夷系言語の影響を受けていた可能性が高いと判断したからである。揚雄の『方言』の記述によると、現在の山東半島方面に限っても「東齊・海岱之間」と「青・徐」（=青州・徐州）と、あきらかに異なった系統のふたつの言語集団があり、その周辺地域を含めると、さらに多くのグループが存在したことがわかっている。そのうち、どの集団と近い関係にあったのかについては、まだ不明な点が残されている。また、『書経』の「禹貢」篇や『後漢書』「東夷伝」の序文などには、東夷の一部が域外から中国内地へ移住してきたことを示す記述があり、その起源や発展の歴史は、決して単純なものではないと思われる。

注

- (1) 鄭張尚芳「勾踐“維甲”令中之古越語的解讀」(『民族語文』1999年第4期、北京)。
- (2) 泉井久之助「劉向「說苑」卷第一の越歌について」(『言語研究』22-23号、日本言語学会、1953)。  
韋慶穩「試論百越民族的語言」(百越民族史研究会編『百越民族史論集』、中国社会科学出版社、北京、1982)。
- (3) Haas, Mary R., Thai-English Student's Dictionary (Stanford University Press, California, 1964), p.269, 412.
- (4) Poppe, N., Grammar of Written Mongolian (Otto Harrassowitz-Wiesbaden, 1974), p.148, 149.
- (5) 前掲論文(1)に同じ、2頁。

参考文献

- Karlgren, Bernhard. Grammata Serica. Script and phonetics in Chinese and Sino-Japanese. Stockholm, 1940. (Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities, No. 12.)
- 大野晋ほか編『岩波古語辞典』岩波書店、東京、1974。
- 高本漢著(潘悟雲ほか編訳)『漢文典(修訂版)』上海辭書出版社、上海、1977。
- 佐伯梅友・馬淵和夫編『古語辞典』(『講談社学術文庫』講談社、東京、1979)。
- 上代語辞典編修委員会編『時代別国語大辞典(上代編)』三省堂、東京、1983。
- [清] 錢繹撰集、李發舜・黄建中點校『方言箋疏』(『訓詁學叢書』中華書局、北京、1991)。
- 李嘉步著『越絶書校釋』(『中國史學基本典籍叢刊』中華書局、北京、2013)。

【付録】 文法要素 (該当する要素は太字で示す)

名詞

格助詞

属格 +N / +nɑ 《~の》

「買儀(塵)」 = \*m'ia+N gæd+[jin-] < \*mi.ja+n[a] kätä 《江・の・如(ごと)く》

「亟怒」 = \*qig[ɑ]-[n]+na < \*ika-ri+na 《怒り・の》  
 対格 +i 《～を》  
 「系」 = \*gæ+i < \*k[ä]kä+i < \*päkä+i 《大矛・を》  
 「鷄」 = \*k[kæ+i < \*k[ä]kä+i < \*päkä+i 《鍛 (=大矛)・を》  
 与格 +[n] / +n 《～(ため)に、～(の方)に》  
 「(儀)塵」 = \*[+N.gæd]+ji-n+[n] < \*di.n-ni+ni 《[～の如く] 往(い)に・に》  
 「單」 = \*ta+n < \*ta+ni 《堵 (=垣)・に》  
 複数  
 「紛紛」《貌》

## 動詞

連用形 -ci / -[n] / -[r]i 《～し》  
 「維」 = \*juə.[r]i < \*dö-ri 《治=繕(よ)り》  
 「(儀)塵」 = \*[+N.gæd]+ji.n.[n] < \*di.n-ni+ni / \*di.n-ri+ni 《[～の如く] 往に・に》  
 「亟怒」 = \*qig[ɑ].[n].na < \*ika-ri+na 《怒り・の》  
 「怒至」 = \*[n].dɑ[c].ci < \*tat-ri 《跳? = 立(た)ち》  
 命令形 +[i].ä / +[i].aw 《～せよ、～しろ》  
 「須慮」 = \*s'u[ə].riä < \*si dö-ri+ja 《船(<治? = 為(し)・繕(よ)れ)》  
 「斷(赤)」 = \*dwɑn.ciä+[k] < \*tuaN-ki+ja 《修=研(と)げ》  
 「士擊」 = \*ʒik.[i].ä+[k] < \*ʒik-ri+ja / \*sik-ri+ja 《躍=頻(し)け》  
 「稽繇」 = \*qi.[r].ei.iaw < \*i-ra.ji+ja.u 《人(<入(い)れ・よ)》

## 助動詞

終止形 +ci 《(過去の回想) ～した(ものだ)》  
 「～之」 = \*[-c]+ci < \*[-si]+ki 《～(し)き》(?)  
 (明治大学大学院文学研究科・博士前期課程修了)

會稽之北... 荆之伯也  
心此謂湯獻牛荆之伯也

越王句踐反國六年皆得士民之眾而欲伐吳於是  
乃使之維甲維甲者治甲系斷修內矛亦雞稽繇者  
也越人謂人鍛也方舟航買儀塵者越人往如江也  
治須慮者越人謂船爲須慮亟怒紛紛者怒貌也怒  
至士擊高文者躍勇士也習之於夷夷海也宿之於  
萊萊野也致之於單單者堵也  
舜之時繇不從令堯遭帝暑之後亂洪水滔天堯使  
繇治之九年弗能治堯七十年而得舜舜明知人情  
審於地形知繇不能治數諫不去堯殛之羽山此之  
謂舜之時繇不從令也

圖版：『龍谿精舍叢書（史部）』所收『越絕書』卷3、第5葉。